

報告タイトル

持続的な統合的廃棄物管理の検討—インドネシア共和国バンタル・グバンを事例に—
“Sustainable integrated waste management: A case of Bantar Gebang in Indonesia”

氏名(所属)

佐々木 俊介(早稲田大学)
Sasaki Shunsuke (Waseda University)

要旨(800字程度)

【背景・目的・方法】急増する廃棄物への対応と貧困の緩和を同時に達成できる可能性がある政策として、インフォーマルな活動であるウェイスト・ピッカーによる有価物の収集を、フォーマルな廃棄物管理政策に組み込む統合的廃棄物管理への期待が、国際援助機関や国際支援を専門とする研究者の間で高まっている。そこで本研究では、2010年2月から現在までに合計滞在日数980日間(33回渡航)、インドネシア共和国西ジャワ州バンタル・グバンの廃棄物最終処分場スラム街において実施したフィールド調査で得られたデータを用いて、ダンプサイト・インフォーマル・リサイクルの実態解明を行ったうえで、統合的廃棄物管理を実施する際の課題について明らかにする。

【結果・考察・結論】調査対象地では、インフォーマル・リサイクルでの地位に応じた住民間の呼び分けが存在しており、それに基づき住民を7種に類型化することができる。更に、この7種の分類と従事する労働の内容に基づき、8種のアクターに類型化することができる。ウェイスト・ピッカーたちによる有価物の収集量は、世帯平均で126.7kg、個人あたりの平均で66.3kgであり、リサイクル率は、0.2%(分母は全廃棄物)、6.6%(分母は生ごみを除く廃棄物)、13.4%(分母はプラスチック系廃棄物)である。ウェイスト・ピッカーの世帯収入の平均値はUS\$179.5(法定最低賃金と同等)であり、個人あたりの平均値はUS\$89.7(法定最低賃金の半分)である。6種の労働に児童が従事しており、非通学児童の平均収入はUS\$49.5である。ウェイスト・ピッカーによる有価物の回収量や収入は、調査方法や分析方法によって大きく異なる。研究手法の不統一がウェイスト・ピッカーの理解を妨げる要因の一つとなっているため、方法論を統一したうえで、効果的な統合的廃棄物管理の在り方について検討していく必要がある。